

## 木造金剛薩埵坐像

金剛薩埵菩薩（サンスクリット語：Vajrasattva）は宇宙の仏である大日如来の化身であり、密教の修行僧が達成できる究極の姿を表している。圓教寺の開祖性空上人（910-1007）は、966年から1007年の間、山で修行中に金剛薩埵菩薩に出会ったと話している。性空上人が密教の教えの影響を受けたのは、この金剛薩埵菩薩からであった。

この像では、金剛薩埵菩薩は精巧な青銅の冠を被り、花のように宝石をちりばめたネックレスを身に着けている。右手には、金剛石のように硬く稲妻のように力のあるさまざまな象徴的な意味を持つ儀式的な武器である五鈷杵（サンスクリット：vajra）を持っており、男性の側面も意味している。左手には、女性の側面を意味する知恵と浄化を表す五鈷鈴を持っている。これらの要素を組み合わせた2つの道具は、金剛薩埵菩薩の特徴である。金剛薩埵菩薩は蓮の花の上で足を胡坐にしている古典的な瞑想姿で表現されている。各蓮の花びらは、仏教の3宝である仏法僧を表している。

彫像の下側の碑文には、1359年に奈良の東大寺の仏師である有名な慶派の開祖、運慶（1223年）の直接の弟子であった康俊によって作成されたことが記されている。彫刻をする前に檜を数個まとめて固定する、寄木造と呼ばれる洗練された接合方法を使用し、眼球には象眼細工の水晶が入っている。